

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第165号

イザヤ 65:1

平成21年6月26日

わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまといおられます。あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使いとされます。またその地を基(もと)の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上に留まっていました。水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷(いかずち)の声で急ぎ去りました。山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。あなたは壩を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、野のすべての獣に飲ませられます……主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわざの実によって満ち足りています。主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます……主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています……あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足ります。あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちに帰ります……私は生きていくかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう……罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ。 詩篇 104 篇

米国の元副大統領アル・ゴアが「地球温暖化は人為排出の二酸化炭素(CO₂)の増加が原因で、このままでは、大変な被害を地球人は被ることになる」と語ったことから、いまや仮説が定説になって国連の主要八カ国首脳会議(G8)はじめ、世界中のマスコミが振り回され、「地球温暖化説」が定着してしまいました。しかし、英国では2007年3月に「人間による地球温暖化は嘘であり、近代で最も大きな詐欺」と訴え、ドキュメンタリー番組が放映されましたが、地球温暖化対策や京都議定書(1997年京都で開かれ、決議された気候変動に関する国際連合枠組条約、UNFCCC)の在り方などを詐欺と見る者たちは少なからずいるようです。

人の生命を支える空気を破壊する大気汚染、地球を紫外線から守ってきたオゾン層の破壊が引き起こす皮膚癌や眼病の増加、オゾン・ホール形成に加担していると指摘されたフロンガス(CFC)、地球温暖化に加担する二酸化炭素はじめ温室効果ガスの増加は自然の生態系や人間社会に大きな影響を及ぼし、人類の生存基盤を揺るがす等々、危機感をあおる未確認の仮説が今や、この世を救うための多くの国際、社会機構を作り上げることに貢献してきたようです。人類の敵、温室効果ガス退治のため生態、自然環境学への関心は高まっています。五月号で、人間史が詐欺にさらされてきたこと、世の終わりには詐欺、欺瞞、ねつ造にさらされることを聖書が預言していることを学びましたが、私たちは思わぬところで、すでに洗脳されてしまっているのかもしれない。

冒頭に挙げた詩篇 104 篇は、創造者なる神への賛美の詩篇です。神の計り知れない知恵によって完璧に造られた天地、大自然、恐竜をも含めた全被造物が、尊厳と威光を帯びた唯一真の神をほめたたえる日が待ち望まれ、歌われています。それには悪者どもが取り除かれなければなりません。聖書では罪人の背後に人類に罪と死をもたらしたサタン、空中の支配者がいることを前提としています。すなわち、サタンとその手下の随天使、悪霊、また、これら悪しき被造物に従った人間が完全に除かれるとき、神の永遠の御国が到来するのです。

創造の第一日目に、神は「光あれ」と言われ、光が存在し、二日目には神は「天を幕のように広げ」、上の水と下の水とに分けられました。言い換えれば、オゾン層の上に水蒸気層、いわば、稲妻、虹、降雪など大気現象に関わる中間圏を置かれ、大地をおおう水と区別されたのです。天を自由自在に伸ばして造作するという表現は全聖書に満ちていますが、「天は巻き物のように巻かれる」(イザヤ書 34:4)のように、宇宙空間が真空ではなく、変形するという主張は、二十世紀になって初めて発見された「宇宙には余剰次元、方向がある」という量子力学の多次元理論で、まさに創造者ならではの主張なのです。創造の三日目には、神は「天の下の水が一所に集まり、乾いたところが現れよ」と命じられ、陸と海との境が明確にされました。このようにして、人間が生きていくために必要なものが大地にも大気中にも備えられ、人間中心の世界が誕生したのです。

すべての生き物の最後に造られたのが、神が「御霊を送られる」(詩篇 104:30) ことによって造られた人間で、「そこを船が通い、あなたの造られたレビヤタンも、そこで戯れます」(26節) と、海の怪獣レビヤタンも神の支配の下では、人間と共存できる海の生き物として描かれています。レビヤタン、ベヘマスとして聖書に登場

する怪獣は、その描写から、海の恐竜、陸の恐竜のことなのです。今日ではノアの時代の突然の洪水によって、大地が寒冷化したため、死に絶えたとみなされていますが、興味深いことに、聖書に記述されているような、また、化石から想像できる特徴をもった恐竜と思われる巨大動物が今も生息しているところがあると、報告されています。創世記が「**神は、海の巨獣と、種類にしたがって……創造された**」(下線付加)と特記していることは注目に値します。進化論信奉者たちが主張するように、人間とは縁のないはるか太古の時代に生きたかのように恐竜を扱うのではなく、聖書は人間との関わりで恐竜を描いているからです。もし、コンゴのリクアラ森林湿地帯やザイールに生息する巨大動物が恐竜であるとしたら、進化論は終焉することになるでしょう。

神は、天地創造を終えられたとき、「よし」とみなされました。したがって、人間の生命を維持するために必要な配慮はすべてなされたのです。ちょうど人間の身体が、自然治癒力、免疫力、体力で病気を克服していくことができるように造られているように、地球を取り巻く大気は自己清浄力、自己調整機構を兼ね備えているのです。大気は温度、湿度、降雨のバランスを絶えずとり、生き物の食、代謝、光合成、神経伝達などの自然現象や生命現象を快適、生産的にするために必要な電気化学的平衡を保つように働いているのです。地表面の環境が生命を支えるに必要なレベルにいつも保たれているのは、生命体に有害なエックス線や太陽嵐の巻き起こす風から、楯となりフィルターとなって守っている電離層が大気圏の上層部にはあるからなのです。大気は単に受動的な機構ではなく、神の御手として力ある働きを活動的に行っているのです。神はこの大気を用いて、地を支配しておられます。確かに聖書は、神が風雨、嵐、津波、降雨、干ばつ、竜巻、地震、火山活動等、大自然のすべてを調節し、支配しておられることを証しています。カナン地では、雷雨、嵐を支配する豊穡神としてバアル神が信奉されていたのですが、人の手で造られた偶像神に何の力もあるはずはなく、実際に天候を支配しておられるのは、唯一真の神ヤウエであることが折あるごとに立証されたのでした。善人にも悪人にも等しく雨を降らせて下さる神は、神を信じ、すぎるものを見放されることは決してなく、大自然を通して守ってくださるのです。

神の家族の一員として、天界の被造物よりもはるかに特権に与る者として創造された人間に、神は、全地の生き物の管理を任せ、ご自分をほめたたえることを望まれました。神の喜ばれることが行われるかぎり、全地は神の祝福に満ち溢れたことでしょう。しかし、この神と人との素晴らしい関係に割り込み、引き離れたのが人間より先に造られ、すでに神に反逆していた天界の被造物サタンでした。使徒パウロはサタンを「**空中の権威を持つ支配者**」と呼び、「**今も不従順の子らの中に働いている霊**」であると語っています。このとき、パウロは「**この世の流れに従い**」、自分の肉の欲、肉と心の望むまま罪に生きている者たちは、この霊に従って歩んでいのであり、罪過の中に死んでいると教え、キリスト・イエスによる救い—信仰によって甦らせられ、天に引き上げられる、神の恵みによる救い—を受けるようにと説いたのでした。パウロがこのエペソ人への手紙を書いたとき、ギリシャ語で「空中」とは、海面から最も高い山の頂上までの間の大気の意味でした。それより上空の大気は「**天空** (英語ではエーテル)」と呼ばれ、密度は希薄で、息ができなくなり、月まで広がっているとみなされたのです。ギリシャ人は、大気中の「より純粋なエーテル」と「不純な成分」とをはっきり区別し、後者を不完全な霊どもの住みかとなし、大気には神の御前に悪行の申し開きをしなければならないさまざまな霊が住んでいると考えたのでした。後世、ユダヤ教でも、天の御使いと悪霊をはっきり区別し、悪霊の住みかを空中とみなしたのでした。パウロの教えには、初代教会の考え方が反映されているのです。

今日、大気圏は四つの垂直構造に分けられています。海拔15kmくらいまでを対流圏といい、その中でも海拔6kmくらいまでの一番低い部分は、ギリシャ語の概念で「空中」とみなされている部分で、対流圏の最上部はジェット旅客機が飛ぶ領域です。その上は50kmまでが地球を取り巻くオゾン層のある成層圏、さらにその上、80kmまでは「流星、隕石の家」と呼ばれる中間圏で、その上は500kmまでがスペースシャトルが飛ぶ電離圏、それより上は外気圏で、宇宙空間と接している大気圏の最上部です。宇宙空間に比べれば大気圏の厚さは非常に薄く、その中でも青空の広がっている対流圏はずいぶん狭い領域ということになるのです。私たちが吸っている大気は主に五つの成分から成っており、78%が窒素、21%が酸素、0.9%がアルゴン、0.03%が今日、敵視されている二酸化炭素、残りは水蒸気、ヘリウム、水素などで、神が創造された地は、生命体が生命を保つことができるように、必要に応じて調整がきく弾力性はあるが、しかし安定している大気でおおわれているのです。

今日、実際には二酸化炭素が生命体を脅かすほど増えているというデータはなく、依然として二酸化炭素の全大気に占める割合は0.03%で、変動はないのが実状のようです。むしろ、温室効果ガス防止はじめ種々の名目の下、環境を守り維持することに努め、社会に貢献していることを印象づけている組織、機構こそ、実際は社会、全世界を支配しようと試みている詐欺機構であるという見解は一考に値するようです。この警鐘は、聖書が空中の支配者を人類の敵サタンと主張していることを考慮すると、決して突飛な憶測ではないのです。大気圏の全大気の半分は、対流圏に集中しているといいますが、まさにこの「空中」で、太古の昔からサタンとの霊の戦いが戦われてきたのでした。サタンがキリストを非常に高い山に連れてゆき、自分を拝むようにと命じたのは、実際そこにサタンの欺瞞のミニストリーの本部が置かれていたからなのです。(次号に続く)